

久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香裳

〔萬葉代匠記 三上〕此さぐめがいはふねは津の國風土記云難波高津は天稚彥天降りし時天稚彦に屬して下られける神天探女磐舟に乗てこゝに至る天の磐舟の泊る故に高津と號云々此集一本にあまのさぐめが鳥舟とよめりとかやむかしさる本ありけるにこそ  
〔萬葉集略解 三上〕古き難波わたりの圖を見るに高津は西の入江によりて今高津といふは古の跡には非ず

難波津

〔書言字考節用集 十數量〕攝州三津數津高津難波津

〔攝陽群談 津六〕難波津

東生郡東高津小橋等ハ仁德帝都タルヲ以テ東生ニ屬ス中今ノ難波津ハ總テ大坂ノ市中ヲ云ヘリ

〔日本書紀 神武三〕戊午年二月丁未皇師遂東舳艫相接方到難波之碕會有奔潮太急因以名爲浪速國亦曰浪華今謂難波訛許奈磨盛

〔古事記 神武中〕神倭伊波禮毘古命中經浪速之波而泊青雲之白肩津

〔日本書紀 神武十〕二十二年四月兄媛自大津發船而往之天皇居高臺望兄媛之船

〔日本書紀 通證 十五〕大津在和泉國應仁

〔書紀集解 應神十〕按古謂都會之地爲大津舟所會謂津此謂大津蓋指難波津也

〔古今和歌集 一〕序なにはづの歌はみかどのおほんはじめなり

大さゞきのみかど仁のなにはづにてみこときこえける時東宮をたがひにゆづりてくら

ゐにつきたまはで三年になりにつれば王仁といふ人のいふかり思ひてよみてたてまつり

ける歌なりこの花は梅の花をいふなるべし中